

## 資料と報告

# 幼児前期の子どもの採血に抱っこで 付き添う体験をした母親の思い

古株ひろみ<sup>1)</sup>、流郷 千幸<sup>2)</sup>、松倉とよ美<sup>3)</sup><sup>1)</sup>滋賀県立大学<sup>2)</sup>聖泉大学<sup>3)</sup>滋賀県立小児保健医療センター

キーワード 幼児前期の子ども、採血、母親の付き添い、座位、プレパレーション

## I. はじめに

プレパレーション（心理的準備）の普及により、治療や検査・処置場面で、子どもが主体的に参加できるための取り組みがこの10年の間に盛んに行われるようになった。しかし、採血などの一般的な処置では未だに母親と子どもが分離されていることも多い<sup>1)2)</sup>。また、看護者の意識に関する調査においても「生後6ヶ月～3歳までの乳幼児にとって採血や注射の処置に母親の同席が必要であると認識する看護師は約3割であった」<sup>3)</sup>と報告されている。

一方、佐藤ら<sup>4)</sup>はプレパレーションの実践を積み重ねた看護師へ調査を行い、母親の処置への参加が重要であることを述べている。さらに、処置に対する母親の認識では、幼児の母親の6割が不安を抱いていた<sup>5)</sup>が、高橋ら<sup>6)</sup>は3～4歳児の処置や検査に付き添った母親が、付き添いにより母親自身の不安が軽減される、また付き添うことにより母親の存在価値を見出すといった認識の肯定的変化を述べている。

吉田ら<sup>7)</sup>は、付き添いがある場合と無い場合との比較から、幼児後期の子どもでは、検査・処置場面で母親が子どもと分離している場合には子どもの不安・恐れが深まるとし、母親が付き添う場合でも母親の子どもの気持ちの共有者・代弁者としての関わりの必要性を強調している。WHOは、親のケアへの参加や医学的処置の際の

同席を勧めており、また、子どもの権利条約も認知発達にさらに未熟な幼児前期では母親と引き離されることで両者にストレスを与えると述べられている。そこで、親と子が主体的に参加できる介入方法が研究されている。具体的な介入では、親と子どもが安心感を得られる方法として座位で付き添う方法が有効であると言われている<sup>8)9)10)</sup>。

先行研究では<sup>11)12)</sup>、幼児後期の子どもへの処置に付き添った母親への効果を明らかにしているが、幼児前期の子どもに焦点を当てた研究はまだみられない。母親の立場から、幼児前期の子どもと同席することは多くの母親の願いでもある。

そのため、幼児前期の子どもとその母親が採血などの処置へ主体的に関わるためには看護者としてどのような支援が必要であるのかを明らかにしたいと考えた。

## II. 目的

幼児前期の子どもの採血に抱っこで付き添う体験をした母親の思いを明らかにすることを目的とした。

## III. 方法

### 1. 対象

採血前に書面及び口頭にて説明し、承諾が得られた1歳～3歳6ヶ月までの子どもの採血に抱っこで付き添った母親18名である。

### 2. 調査方法

採血前の待合い場所から母親とその子どもに関わり、

2010年9月30日受付、2011年1月9日受理

連絡先：古株ひろみ

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail：kokabu@nurse.usp.ac.jp

処置室への入室時も同行し採血時の子どもと母親の様子を観察した。また、採血終了後に母親から付き添い・抱っこでの採血などについて語ってもらった。面接時間は20分程度である。

### 3. 採血の方法

処置室付き添い希望の有無を確認後、入室し、子どもの好きなDVDのソフトを選んでもらう。母親は椅子に座り、母親の膝に子どもと向き合うまたは後からの抱っこの姿勢で子どもを抱き、採血側の反対側にDVDプレイヤーを置き、子どもの手を採血台に乗せ、採血を行う。看護師や母親は声かけ・おもちゃで気を紛らわせる・DVDを見せるなどのサポートを行う。採血後は採血部分にキャラクターが描かれた絆創膏を選んで貰い、「頑張ったね」と子どもに声をかけて、採血を終了する。

### 4. 分析方法

面接内容を逐語録として、抱っこで付き添う体験の事柄の特徴的な発言を抽出し類似性に基づき分類した。

分析過程において、複数の小児看護専門領域の研究者で検討を重ねた。

### 5. 倫理的配慮

採血前に書面及び口頭にて母親に説明を行い、署名にて同意を得た。対象者には研究の目的・方法・プライバシーの確保・参加の任意性と中断の自由と、また研究内容の公表の可能性などを説明し同意を得た。なお、A大学およびA病院倫理委員会の承認を得て行った。

### 6. 用語の操作的定義

幼児前期：1歳から3歳6ヶ月の子どもとした。

抱っこ：母親が椅子の上に座りその膝の上に子どもを抱く姿勢とした。

### 7. 調査期間

平成21年1月～平成22年6月

## IV. 結果

子どもの年齢は1歳～3歳6ヶ月であった。その内訳は1歳児7名、2歳児8名、3歳児3名であった。母親は平均年齢34.1±3.4 (26-38) 歳。今回が初めての採血であったのは2名であるが、その内1名は注射の経験がある。その他の子どもはすべて採血の経験があり、5回以上採血したことがある子どもが1名いた。

採血時の子どもの様子から、採血時、ほとんど泣かずに採血できていたのは2名(事例 i・k)、であり、共に2歳児であったが、採血経験の有無による影響は無かつ

た。1歳児でも泣くもののすぐに治まる(事例 c)、採血前から採血中まで激しく泣く(事例 g) など事例により様々であるが、ほとんどの子どもは採血中泣いており、年齢による差はみられなかった。他にDVDの使用が良かったとする意見や、子どもの主体を引き出すため看護師のゆっくりと関わる姿勢から母親が安心感を得た発言が聞かれた。

また、6名の母親は事前に子どもに採血の説明をしており、その子どもの年齢は、1歳7ヶ月1名、2歳児3名、3歳児2名であった。

抱っこで付き添った母親の思いの分析結果から、【一緒に安心】、【泣くことの受容】、【抱っこの難しさ】の3つのカテゴリと8つのサブカテゴリを抽出した。以下、抽出されたカテゴリについて面接データを加えながら、カテゴリ【 】、サブカテゴリ「 」, 主要データ< >を用いて説明する。

#### 1. 【一緒に安心】

このカテゴリは母親が子どもと抱っこで一緒に付き添うことの意義を表している。4つのサブカテゴリを抽出した。

過去の採血経験から、子どもと引き離されたことで泣き声だけの不安< 離れることの不安 >から「母子分離経験からの不安」を感じていた。

また、母親が処置中傍にいても、< 子どもの顔を押しやる辛さ > < 押しやるのは一緒にとは違う > と感じた過去の採血場面と比較して、< 母親として参加する感じ > < 声のかけやすさ > からの抱っこ姿勢による「子どもとの一体感」を感じていた。また、付き添うことで人見知りする > 子どもにとっても、< 子どもの不安も減る > と子どもの立場から「一緒に子どもの不安軽減」になると認識しており、< 抱っこでの採血は良かった > と「抱っこの良さ」から付き添う事を肯定的に感じ、母親は【一緒に安心】と一緒に参加することで安心だったと感じていた。

#### 2. 【泣くことの受容】

このカテゴリでは、子どもの泣く姿に対する母親の思いを表している。2つのサブカテゴリが抽出された。母親は採血場面で泣いている子どもを見て、< 泣くだろう > < やっぱり泣いた > と子どもが「予測通りの反応」であったと感じていた。また、一緒にいることで、< 泣いててもあー泣いてるわって感じ >、< 怖くて泣いてただけ > と泣いている状態が理解できることで、「泣いてもがんばっている」と子どもの状況を捉えて、母親は子どもが【泣くことの受容】を経て、泣くことには心配や不安がないことを感じていた。

#### 3. 【抱っこの難しさ】

このカテゴリでは、母親の抱っこ姿勢での参加の難しさを表している。2つのサブカテゴリが抽出された。

表1 子どもの採血時の様子

	子どもの年齢	採血経験	採血時の児の様子
a	1歳0ヶ月	有	平静に入室する。採血中は泣き、立とうとして動く。
b	1歳1ヶ月	有	入室は平静に。抱っこしてしばらくするとDVD見ているが、駆血帯を巻くと泣くがDVDで泣きやむ。採血中は泣いているが、時々立とうとするが大きく暴れることなし。採血後は直ぐ泣きやみはいはいして機嫌良い。
c	1歳2ヶ月	無	入室は平静で母親に抱っこされて来る。向かい合わせに座る。DVD見ているが、刺した後より泣く。DVD はあまり見てない。足を踏ん張って立つ。時々うーんと泣くが直ぐに治まる。
d	1歳5ヶ月	有	入室は平静で、駆血帯で関わりと泣き始める。ずっと泣いたまま。
e	1歳6ヶ月	有	入室の誘導にも応じる。向かい合わせで抱っこで、DVD見ている。おとなしく見ていたが、手を押さえられると泣き出し、DVDを見ないでやや暴れ泣いている。穿刺後も同じ様に泣いている。
f	1歳7ヶ月	有	それまではおとなしい。針を刺すと泣く。シール貼っても泣いている。
g	1歳8ヶ月	有	座った時から泣いていた。針を刺す時も泣いている、採血中は反って動く。終わったら泣きやむ。
h	2歳2ヶ月	有	入室までは普通に手を引かれて入る。抱っこされて、DVDを見る。手を押さえられてから泣く。最初は強く泣き、一端治まるが、終わりの方で強く大泣きする。抜針後もしくしく泣くが、処置室を出てからは泣かずに一人で歩く。
i	2歳2ヶ月	無	子どもはDVDみたり、採血操作をみたりするが、採血中は泣かず。
j	2歳4ヶ月	有	すんなり入室するが採血の姿勢になると泣く。針を刺す前にDVD見ているが、針を刺している間に再び泣き動く。採血後は自分でご褒美シールを持って、シールを貼って貰い泣きやむ。
k	2歳4ヶ月	有	誘導に応じて平静に入室し、DVD見ていた。針を刺したときに、少し顔をしかめるが、ずっとDVD見て泣かずにいる。
l	2歳6ヶ月	有	手をにぎられたら大きく泣く。「ママ」刺したら泣く、足動く、よこにいるお父さんが足おさえる。終われば泣きやむ。
m	2歳8ヶ月	有	DVD見ながら入ってくるが、座ると緊張が強くなる。はじめはそれどころでは無い感じだが、落ち着いたらDVD見ている。針を刺すと泣き、動く。抜針後もぐずぐず泣く。母親に顔を埋める
n	2歳8ヶ月	有	入室は平静で抱っこされDVD見ている。針を刺した時に泣く。採血中ずっと泣いている。
o	2歳9ヶ月	有	入室の時、少し立ち止まる。DVD見ている。ゴム巻いただけで泣く。針を刺している時それを見ている。少し痛みが泣くが、その後DVD見ている間に終わる。
p	3歳0ヶ月	有	DVD見ていたが、採血開始し手を見て泣く。「いたい」「いたい」と採血中ずっと泣く。
q	3歳3ヶ月	有	「ちっくんいや、ちっくんいや」と言って入ってくる。抱っこしているが、針を刺す前から泣く、痛いといっている。針を刺すときも泣く。「ちっくんいや」「ちっくんいや」足は動かすが、手は動かさず。終わると泣きやむ。
r	3歳6ヶ月	有	入室時はDVD見ながら機嫌良く入ってくるが、腕をまくる時に泣き出す。採血中に暴れて泣いている。抜針後も泣いている。

表2 採血に抱っこで付き添った母親の思い

カテゴリー	サブカテゴリー
一緒に安心	母子分離経験からの不安 子どもとの一体感 一緒に子どもの不安軽減 抱っこの良さ
泣くことの受容	予測通りの反応 泣いてもがんばってる
抱っこの難しさ	子どもの動き 子どもの成長

<力が強くて大変>と抱っこの感想を述べ、1歳児では<立つので大変>と感じる「子どもの動き」による大変さと合わせて、前回の採血経験から<だんだん力強くなる>とした「子どもの成長」から母親は【抱っこの難しさ】を感じ、抱っこも子どもを後から抱える姿勢で臨み、<向かえ合わせより楽、でも顔が見えない>と上手な抱き方を模索していた。

## V. 考 察

今回、幼児前期の子どもの採血に抱っこで付き添った母親の経験から得た思いについて分析し、【一緒に安心】、【泣くことの受容】、【抱っこの難しさ】3つのカテゴリーを抽出した。

対象となった母親のうち16名は、過去に子どもが採血を受けた経験があり、その中には処置場面で子どもと分離された経験や、処置に同席しても母親がわが子を押さえつけていた経験を持っていた。佐藤ら<sup>13)</sup>の、大学生の採血経験の語りでは、2・3歳頃に『押さえられる行為は母親でも嫌』と感じていたり、母親と無理矢理引き離され恐怖を感じたなど、親との分離不安や親に押さえつけられたことを、子どもの立場で述べており、今回母親が語った過去の採血で感じていたストレスを子どもも同様に感じていると考えられた。さらに、幼児前期では母親自身、子どもが低年齢であるほど母子分離を実施することが難しいことが示唆された。

抱っこで付き添う採血は、子どものそばにすることで子どもとの一体感や子どもの不安が軽減できるという安心感から、【一緒に安心】と感じていることが分かった。今回は幼児前期であり、母親にとって抱っこして参加することは<母親として参加する感じ>や<声のかけやすさ>などから自然な介入を促しやすい姿勢であり、なだめたり、励ましたりできることで、抱っこでの参加が効果的であると考えられる。吉田ら<sup>14)</sup>は、幼児後期の子どもの

処置で母親が傍にいても医療者の要請に合わせるような強要者の役割を担うと子どもの混乱の引き金になるとし、一緒にいる母親が『気持ちの共有』など気持ちの共有者や代弁者としての関わりの必要を示していた。

見知らぬ人に取り囲まれることや痛みから生じる恐れで、幼児前期の子どもが泣くのは認知発達のレベルでは当然の反応である<sup>15)16)</sup>。その状況を一緒にいることで、<怖くて泣いていただけ>と子どもの泣いている状態が理解できることで、【泣くことの受容】を経て、子どもの気持ちに共感することが母親にも出来、さらにそのことが子どもの感情表出を支えていたと考える。

母親は抱っこで「子どもとの一体感」を感じていたが、「抱っこの良さ」と共にDVDの良さも感じていた。DVDの存在は入室時の緊張した母親にも子どもに声がかかりやすくなり、子どもが一瞬でもDVDに興味を示すことで母親も共感できる時間を持つなど、DVDは母親が主体的に関われる支援の一つとなっていた。さらに、看護者のゆっくりと関わる姿勢から母親が安心感を得たという発言から、先行研究にもあるように看護師の子どもへの声かけが母親の<関わりモデル>になること<sup>17)</sup>など、ただ抱っこして採血するだけではなく、看護者を含めて処置する環境を作り上げていくことの必要性が示唆された。

幼児後期を対象とした先行研究においても母親が付き添うことの意味や抱っこの有効性を述べていた<sup>18)19)20)</sup>。

今回の幼児前期においても同様に母親が付き添うこと、特に抱っこでの付き添うことの意味を得ることができた。しかし、子どもが泣いて暴れ動いた場合に、【抱っこの難しさ】を感じていることが分かった。チャイルドライフ・スペシャリストが述べる介入にもディストラクションや声かけ、抱っこ姿勢が示されている<sup>21)</sup>。だが、今回の結果から年齢や体格などに応じた抱っこの方法を具体的に示すことが必要であると考え、母親に子どもの安全性を踏まえた具体的な抱き方に対する支援の必要性が示唆された。

採血などの処置について母親は子どもに言っても解らないと思っているが<sup>22)</sup>、子どもに採血経験のある場合、母親は事前説明が必要であると感じている<sup>23)</sup>。今回も採血経験のある子ども6名の母親が子どもに採血の事前説明を行っていた。母親の<病院に行くと言ったら"ちっくんやな"と子どももわかってた>といった発言から、採血に臨む母親と子どもの覚悟が感じられた。今後は採血場面の取り組みだけでなく、事前の関わりへの支援の必要性も更に示唆された。

## VI. 結 論

幼児前期の子どもの採血に抱っこで付き添う体験をし

た18名の母親の思いについて検討した。幼児前期の子どもの処置に母親が付き添うことの意義や抱っこ姿勢の効果と発達や体格に応じた抱き方の支援の必要性が示唆された。

ただ、母親と子どもが主体的に処置に取り組むためには、看護者を含めた医療者とともに、処置に取り組める環境を作り上げていくことの必要性も示唆された。

また、母親を中心に今回は検討していたが、観察を重ねている中で父親同伴や、父親が採血に抱っこで参加し、待合いで母親は下のきょうだいと待っているといた父親の参加がみられるようになってきている。母親のみならず父親を対象とした関わりや家族機能を捉えてケアを考えていく必要性も今後の課題である。

## 謝 辞

今回の調査に当たり、快くご協力頂きました皆様に感謝致します。

## 文 献

- 1) 杉本陽子, 前田貴彦, 蝦名美智子, 二宮啓子, 半田浩美, 松森直美, 鈴木敦子, 榎木野裕美, 赤川晴美, 高橋清子, 鎌田佳奈美: 子どもが採血・点滴を受けるときに親が付き添うことについての実際と親の考え, 三重看護学誌, 7 101-108, 2005.
- 2) 鈴木恵理子, 小宮山博美, 宮谷恵, 小出扶美子, 入江晶子, 松本かよ: 小児の侵襲的処置における家族の付き添いの実態調査 2005年の調査を1995年の調査と比較して, 日本小児看護学会誌, 16(1) 61-68, 2007.
- 3) 平岩洋美, 福嶋友美, 大西文子: 乳幼児の採血・注射時に親が同席することの現状と看護師の認識, 日本小児看護学会誌, 17(1) 51-57, 2008.
- 4) 佐藤徳子, 津田美知恵, 森田康子, 加悦嘉子, 工藤好子: 採血・点滴処置時のプレパレーションを実施した看護師の気づき, 日本看護学会論文集 小児看護, 40号 9-11, 2010.
- 5) 流郷 千幸, 宮内 環: 幼児の処置場面における保護者のかかわり, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 1 (1), 46-55, 2003
- 6) 高橋友希, 森本明美, 小林聖子, 小原悦子: プレパレーションを取り入れた児の処置に対する母親の意識の変化 採血検査に参加した母親のアンケート調査を実施して, 日本看護学会論文集 小児看護, 38号 316-318, 2008.
- 7) 吉田美幸, 鈴木敦子: 検査・処置を受ける幼児後期の子どもの必要としている母親の関わり, 日本小児看護学会誌, 18(1) 51-58, 2009.
- 8) 吉田陽子, 沢内節子, 毛利幸江, 中村令子採血場所の選択肢を設け, 小児の意思を尊重した採血方法椅子に座り腕を出す姿勢での採血を実施できる年齢の検討:, 日本看護学会論文集, 小児看護 33号 133-135, 2003.
- 9) 細野恵子, 市川正人, 上野美代子: 小児科外来で採血・点滴を座位で受ける乳幼児に付き添う家族の認識, 日本小児看護学会誌18(3) 52-56, 2009.
- 10) 細野恵子: 外来で母親の付き添いのもとに座位で採血あるいは点滴を受ける幼児の対処行動, 日本小児看護学会誌, 19(1) 88-94, 2010.
- 11) 中松己志子, 山崎博美, 恒川幸美, 扇原益美: 持続点滴施行時の親の思いと児の反応, 日本看護学会論文集 小児看護 30号 71-73, 2000.
- 12) 前掲書, 10)
- 13) 佐藤加奈, 蝦名美智子: 大学生が語る幼児期の注射の経験, 日本小児看護学会誌 18(1) 105-111, 2009.
- 14) 前掲書, 7)
- 15) 坂本扶美枝, 相吉恵: 子どもへのプレパレーション 混合病棟で取り組めること, 小児看護 30(10) 1419-1426, 2007.
- 16) 上田礼子: 生涯人間発達学, 91-92, 三輪書店, 2009.
- 17) 前掲書, 4)
- 18) 前掲書, 6)
- 19) 前掲書, 9)
- 20) 前掲書, 11)
- 21) 前掲書, 15)
- 22) 込山洋美: ケアに必要な知識と留意点 検査・処置を受ける子どもをもつ親の思い, 小児看護 23(13) 1744-1748, 2000.
- 23) 戸井紀子, 安田明美: 子ども採血における事前説明の必要性に対する母親の思い, 日本看護学会論文集 小児看護 38号 122-124, 2008.
- 24) 武田淳子: 採血に対する幼児の反応・行動に影響を及ぼす要因, 千葉看護学会誌 4(2) 8-14, 1998.
- 25) 込山洋美, 筒井真優美, 飯村直子, 蝦名美智子, 二宮啓子他: 検査・処置を受ける子どもと親のずれ, 日本小児看護学会誌 10(1) 9-16, 2001.
- 26) 二宮啓子, 蝦名美智子, 半田浩美, 片田範子, 勝田仁美他: 検査・処置を受ける子どもへの説明と納得の過程における医師・看護師・親の役割 日本小児看護学会誌 8(2) 22-30, 1999.
- 27) 松森直美, 二宮啓子, 蝦名美智子, 片田範子, 勝田仁美, 小迫幸恵他: 「検査・処置を受ける子どもへの説明と納得」に関するケアモデルの実践と評価(そ

の2) 子どもの力を引き出す関わりと具体的な看護  
の技術について, 日本看護科学会誌, 24(4) 22-35,

2004

## (Summary)

# How do mothers feel when blood collection is made to their infants in their arms ?

Hiromi Kokabu<sup>1)</sup>, Chiyuki Ryugo<sup>2)</sup>, Toyomi Matsukura<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> University of Shiga Prefecture

<sup>2)</sup> Seisen University

<sup>3)</sup> Shiga Medical Center for Children

**Key Words** blood collection, mother's presence , seated on mothers' laps , Preparation